

# 視点

## 児孫に美田を“残す”時

ぶぎん地域経済研究所 代表取締役社長 松島 博



東日本大震災が発生してから、2か月が経過した。振り返るとこの20年、苦難の連続である。ことに、前半の10年（1991～2001年）は、日本が多くの困難に遭遇した10年であった。バブル崩壊後の経済運営は誠に多難で、回復のために当初想定していたより遥かに多くの年月が費やされてしまった。最後には、金融機関の大きな再編成まで余儀なくされた。この間、社会全体を不安に陥れるような阪神・淡路大震災、オウム真理教によるサリン事件なども起きている。前半最後の大事件は、海外で発生した。2001年9月11日、ニューヨークにある世界貿易センタービルを襲った、あの同時多発テロ事件である。

後半の10年（2002～2011年）は、欧米経済の活況に加え、中国に代表される新興国経済が勃興する中、日本経済もようやく復調し、戦後最長ともいわれる景気回復を記録した。ところが、2008年9月15日リーマン・ショックが発生、その激震は瞬く間に世界を駆け巡り、世界経済はパニックに陥れられた。あまりに大きなブレーキであったことから、欧米を中心に回復は遅速で2年半以上経った今日ですら、財政不安と高い失業率などに悩んでいる。我が国もリーマン・ショックの影響を受けたが、中国を中心とする東アジア諸国の経済成長に後押しされ、ようやく回復途上であったところ、今回の大震災に襲われてしまったのである。

こうして振り返ると、経済社会がこの20年で次のように大きく変容しているように思われる。第一に、世界経済の主役は日米欧先進

国から中国をはじめとする新興国へ移っている。日本が長年誇ってきた GNP 第2位の位置も、昨年中国に追い抜かれた。第二に、日本が得意とする高品質・高機能な「モノづくり」は、中国・韓国製品による代替が進み「いつでも・どこでも」企画・製造ができる国際的な水平分業の時代を迎えている。

第三に、国内における消費者心理は「モノを所有する」喜びから、「満足・充足感を求める（ワクワク・ドキドキ感）」に移っている。また、デフレ経済の進行により、消費の場も百貨店・大型スーパーから高品質で低価格な商品を提供する専門店チェーンに移っている。第四に、生産・販売サイドには、ややもすると「ナンバーワン」を諦め、「オンリーワン」へ路線変更の風潮さえある。

心配なのは、世界から評価されていた職業上の「勤勉性・倫理観」といったものにも衰えがみられることだ。第五に、高齢化社会の進行とも関連するのだろうが、なんとなく「自分の世代だけ良ければ」という、逃げ切り型の姿勢が社会の中に感じられることだ。

そんな事を思っていた最中、これまでにならぬ災難に遭遇しながらも土地を捨てず、新たな復興に取り組む生真面目で、忍耐強い東北人の姿に接し、家族・郷土に対する強い愛を感じ取った。西郷隆盛の詩に『児孫の為に美田を買わず（残さず）』とあるが、今はよりよい経済社会を次世代に引き継ぐ志を持って、我が国が対峙している国難に取り組む『美田を残す』時と考える。

（埼玉新聞 5月13日付 掲載）